

## 二、玉山金山のあらまし

### 一、位置

岩手県陸前高田市竹駒町にあつて、JR大船渡線竹駒駅から北方向へ約五キロメートルの距離に、玉山金山遺跡があります。遺跡は霊峰氷上山（八七五メートル）の西麓に位置し、山容はあたかもお椀を伏せたようにも見られ、往時の賑わいを偲ばせる地名や旧跡も残されている所です。

### 二、玉山金山の歴史

#### 古代から中世までの産金

金山の歴史は古く、天平年間僧行基が諸国を行脚し、やがて竹駒村の長根にさしかかり微睡まどろんでいたところ、夢に弁財天が現われ、金山を発見したという伝説がこの「玉山金山」の始まりと伝えられています。

天平十五年（七四三）護国安泰を願つて、聖武天皇は「盧舍那大仏造立の詔」を布告しました。しかし、工事の途中で大仏に鍍金どきん（メッキ）する黄金が不足し大変困っていました。天平二十一年（七四九）陸奥守百済王敬福が小田郡から産出した黄金九百両（十三、五キログラム）を献上したのです。これが日本で初めての産金ということで大いに喜び、元号を「天平勝宝」と改めたということです。

陸奥守の敬福という人は百済系くだらの渡来人で、早くから多くの採金の技術者を使って金を発見していたのでした。時あたかも朝廷が金を求めることを知り、早速敬福は大仏への鍍金のためとして黄金九百両を献納したのでした。

さらに藩政時代御金山下代を勤めた松坂家の文書には、「気仙郡竹駒村玉山金山来歴綴」が残されていて、その中に、一気仙郡竹駒村之内玉山金山と申は天平年中黄金初而掘出（中略）貢物奉捧候由一と記されている文言があり、これをもつても黄金九百両の中に、玉山産出の金も含まれていたと考えられます。

「炭焼藤太」の伝説は、ここ玉山金山遺跡にも残されています。伝説には、都のさる高貴の方の姫が、婿を撰ぶのに困っていました。清水観音の夢のお告げによって気仙の炭焼藤太と夫婦になりました。その姫から一金の何たるかを教わる一という話です。物語りの中の主人公は金山に住んでいながらその価値を知らなかったのです。そのころの道奥みちおくの人々は藤太と同じように金がどのような価値があるものか、全く認識がなかったのです。

平泉藤原氏が、天治元年（一一二四）金色堂を建立しますが、それに要した黄金について、松坂家文書には、一玉山並に同郡浜田村茂倉御金山より大分の黄金掘り出、その黄金を以て光堂も御建立一と記されています。ここからも玉山金山や茂倉金山の金が、金色堂の建立に大いに貢献したことが分ります。

一方では、平重盛（平清盛の長男）が、知行地である気仙郡からの産金千三百両を宋国の育王山に寄進して、祠堂しどうの建立と自らの菩提を弔う事を祈願したことが、「源平盛衰記」に記されています。

このようなことから、当時気仙郡はかなり有力な産金地帯であつたことを窺い知ることができます。

さらに、金の採取地を地名に求めてみると、天平産金で一躍有名になつた宮城県みやぎけんの遠田郡黄金迫や東磐井郡の砂鉄川、西磐井郡の金流川、栗原郡の黄金沢などが

あげられ、いずれも往時の砂金採取が行われた所から生じた名称とされています。ところで、この時代最も多くの砂金が採取されたのは、世田米村の金山と言われ、「気仙砂金の宝蔵」と呼ばれていたのです。

古代から中世の末頃までの金の採取は砂金であり、「川砂金」と「柴金」（別に土金ともいう）に分けられましたが、気仙地方の採金はそのいずれでもあったようです。今でも柴金採取の遺構であると思われる場所が竹駒町内のあちらこちらに散見されます。

### 中世末から近世までの産金

中世末になると急激な産金の増加が見られ、その主な要因となったのは、採掘技術の進歩と合せて金に対する需要の増加によるものでした。

古代から中世までは、砂金の採取が全てでしたが、中世末である戦国時代に入ると、採金技術に大きな変化が表われ、鉱石を直接掘り出すいわゆる「山金」の採掘に変わったのです。

はじめは金鉱石が風化した脆弱な露頭を掘り出す「露天掘り」でしたが、次第に堅い岩盤の中に鉱脈を追う「坑道掘り」に移行しました。そのためかつての砂金採取と異なり、採金の技術にも大きな変化が表われ、一貫した作業行程を経て金の採取が行われるようになったのです。

その後、天正十八年（一五九〇）天下統一を成しとげた豊臣秀吉は、鉱山の公有政策を打ち出し、そのため気仙のおもな金山は、文禄二年（一五九三）には豊臣秀吉の管理下に置かれました。ついで、秀吉は金山の支配を確実にするため、松坂徳右衛門定久を「公儀御金山御用」に任命し、玉山金山でその仕事にあたらせたのです。さらに慶長三年（一五九八）には伊達政宗が「御金山下代」に任命し、玉山金山をはじめ、気仙郡内外の鉱山の管理運営に当らせたのです。

### 坑道掘り以降の玉山金山の盛衰

玉山金山の最盛期は初代伊達政宗から四代綱村に至る間で、特に文禄三年（一五九四）ころ、金山師安斉万右衛門の手で栄え、さらに慶長十六年（一六一一）に雪沢の金山師小野寺源太郎が、大直利（富鉱脈）を掘り当てて大盛になり、山は活況を呈したということです。ついで、寛文十一年（一六七二）仙台藩存亡の危機といわれた伊達騒動の後、幕府の没収を免れるため、玉山金山の坑口は崩壊され廃山になりました。

やがて、宝暦年間（一七五一〜六三）と文化年間（一八〇四〜一七）に再開発を試みたものの、かつての富鉱脈を発見することができなかつたと伝えられています。また、一方では、同じ文化年間に「露頭から掘り入りわずか二ヶ月で旧坑に貫通、登山坑に入り検分したところ予想通り処々に味噌玉程の砂金をホッキ貝に油を灯し掘取った様子を見ることができた。ここには百年以前のホッキ貝が敷しきの中に多数あった」ということから、当時の坑内での採掘風景をかいま見る思いがします。

このように延宝年間（一六七三〜八一）ごろまでは、金山も繁栄を極め、「雪沢千軒・玉千軒」と呼ばれるほど金掘りの人夫で賑わっていました。しかしその後金が掘り尽され、人夫は次第に山を下りる様になっていきました。文政四年（一八二二）、瀬戸（勢戸）和右衛門が、慶長年間に開いた古い坑道を再開坑して、高品位の鉱脈を掘り当てました。この時期には一時的にせよ玉山金山に活気を取り戻したことは間違いありません。

## 明治以降の金山の様相

明治三十年（一八九七）ごろ、玉山金山は再び開発を試みますが、坑内から湧き出る水のため作業を断念せざるを得ませんでした。

しかし明治三十七年、日露戦争の拡大したころ政府は戦費の調達のために、帝国工科大学の学長渡辺渡博士が大蔵省の依頼をうけ、玉山金山を初め気仙地方の主要な金山の金鉱を調べ、四十余億円余りの埋蔵金があると発表して欧米から八億円の借り入れをし、また同時に「大蔵省所属金鉱区域」に指定されました。

その後太平洋戦争の最中、昭和十八年発令の「金山整備令」によって、当山は休山となりましたが、戦後再び鉱山開発の気運が高まり、着手したものの捗<sup>はか</sup>ばかしくなく、撤退する事業家が多かったようです。

そんな中で、平成の初めころまで、地元の作業員十数人を雇って操業していた会社もありましたが、金鉱脈の枯渇から休山し、現在に至っています。

### まとめ

天平産金に始った当金山は一二五〇年の星霜を重ね、国内外に大きくその存在をアピールしてきました。

マルコ・ポーロの「東方見聞録」や、それに触発されてのロンブスによる「黄金の国ジパング」をめざした新大陸の発見など、洋の東西を問わず人々にロマンを与えた黄金は未来に向けて語り伝えられていくことでしょう。